

## 東寺と空海から考える「弘法さん」

井實 嘉月

(2020年入学 4期生)

現代の日本で、平安京の遺構が残っている世界遺産がある。その一つが、羅城門を挟んで東西に建立された左寺にあたる鎮護国家の寺院「東寺」である。現在も、東寺は人々と密接な関係にあり、毎月21日には境内で多くの店が出店する「弘法さん」といった催しが脈々と受け継がれている。私の好きな京都では、東寺と弘法さんについて掘り下げたい。そのためには、二つに大きく関わっている空海を蔑ろにはしてはいけないうだろう。本稿では、東寺の歴史と空海の関係性から現在の弘法さんの成り立ちを語ることにする。



東寺の正式名称は教王護国寺であり、桓武天皇が平安京遷都をした後の796年に、西寺と共に建立された。東寺が建立された目的は、日本の国家鎮護を安んじるための官大寺であった。また一説として、国家鎮護の官大寺ではなく国賓用のホテルの役割であったともされている。平安京は大唐の長安をモデルに都市計画は行われた。その長安には使者を泊める鴻臚館があった。鴻臚館は平安京以前の日本の都でも設けられており、裴世清が訪れた608年に難波の岬の一角、688年に福岡城敷地辺り、その後渤海国との交流が盛んになり敦賀にも設けられた。しかし、長安をモデルにした平城京には鴻臚館が設けられた形跡がない。司馬遼太郎は、平安京に建立された両寺の役割を鴻臚館と同じ国賓用ホテルであると考え、両寺の興隆から日本の富強を誇ることが動機だと考察していた。その後、渤海国以外との交流が盛んにならず費用の支出に困り、やがて渤海国も滅びることで次第に役割を失い寺院になったと考えている。しかし、この説を裏付ける根拠はないため、現在は当初から寺院であったとする見解が通念とされている。そのような同じ目的で建立された東寺と西寺は、全く異なる道を歩むことになった。東寺は現在も残っているが、西寺は廃絶している。私は、両寺の違いは空海が下賜付属されたかどうかであったと考える。879年に、畿内五カ国に対して四千町歩の官田を作り中央財源を捻出した元慶官田から、中央財政の悪化が確認できる。『新版 古寺巡礼 京都 東寺』では、9世紀後半に政府が中央財源の確保を優先し、官舎や国分寺などの国衙諸費用は二の次だという方針を打ち出したと書かれている。両寺とも官大寺であり、空海に下賜付属されなかった西寺は運営が厳しくなり、現在では廃絶してしまった。一方、現在も東寺が現代に残っている理由は、空海が存在が大きいと言っても問題ないだろう。



東寺文化財  
弘法大師像(談義本尊)(部分)  
東寺蔵

続いて、空海が東寺を下賜付属された経緯を明らかにしていこう。空海は無名の留学僧として唐に渡り、長安で2年間正統密教の修行を行い帰国した。当初は20年の留学期間であったが、その期間を無視しわずか2年で帰国したことから、朝廷のお咎めを受ける危険もあった。しかし、次の遣唐使船を待つと時間がかかりすぎること、そして、唐に渡り3ヶ月で伝法灌頂という密教の教えの極位を伝える儀式を受け、2年間で正統密教を受け継いだことから、806年に帰国を決意した。朝廷からの返事は、福岡県の観世音寺へ一時滞留せよといったものであった。これは、空海の処置に困ったことと經典や曼荼羅、仏具などの請来品の検

閲、有用性の検討に時間が必要だったからである。本稿の要とも言える空海が東寺を下賜されるのは823年であり、帰国してからおよそ27年の歳月を経ている。司馬遼太郎によると、空海の密教に対する捉え方は仏教の新発展した体系だと考えていたが、人々の多くは仏教の付随的な部門にすぎないという認識であったことが関係しているようだ。帰国後空海は様々な寺に移ったが、真言密教の一大寺院をつくれずにいた。密教は即身成仏という身・口・意の三密を修行することで生きるもの全てが成仏できるという思想があり、修行のために多数の装置と用具を備えた密教寺院が必要だと考えていた。世間に理解してもらうためには、国家の権威と経費を用いて考えを浸透させる必要があると考えていたのではないだろうか。そのために、空海は唐文化に興味を持っている文人肌の嵯峨天皇と盛んに交流した。その後、嵯峨天皇が密教の思想に深く共感されたことと、卓越した土木技術を見込まれ、東寺を勅賜されるに至ったと考えられる。空海は、讃岐国の満濃池という洪水が多いため工事が全く進まない工事の困難な地域の再築を、三ヶ月で終えるほど土木技術に優れていたのだ。

嵯峨天皇から東寺を勅賜された空海だったが、金堂が一宇あるだけとほとんど何もない状態であった。朝廷は、東寺に50人定員の真言僧を常住させる命令をした。従来南都の寺院では、複数の宗派の僧が住むのが原則であったことを考えると、真言僧だけの真言密教の寺院は実に画期的であった。金堂のみという状況からの東寺の造営で、空海は講堂に最も力を入れた。東寺には、密教の中心的な建物がないため、講堂の建立が重要であった。講堂内では合計21体の密教像を安置しており、日本でも他にない立体曼荼羅が形づくられている。こうして講堂に着手しつつ、同時に五重の塔の建立にも取り組み始める。五重の塔の用材は、空海の願いにより朝廷や各省から2490人もの人が動員され、東寺付近の伏見稻荷山から運ばれた。



こうして東寺の造営に尽力した空海だが、ついに五重の塔の完成を見ずに入定してしまう。空海が残した五重の塔は、幾度の災害を乗り越え現代に形を残している。その後、鎌倉時代末期から室町時代にかけて、東寺への土地の寄進が各地から行われた。この時代には、公家や武

家だけでなく一般の庶民にも大師振興は広まっていた。そのため、東寺には毎月 21 日に行われる御影供へ相当数の参詣人が訪れていた。東寺南大門には一服一銭の茶店が出ていたことが分かっており、これは弘法さんが現在の形態になった一つの理由と考える。



空海の命日である 21 日は、空海が生前住んでいた御影堂では空海の遺徳を偲ぶ法会が行われ、境内では全国から誰もが出店する。そして大勢の人々が弘法さんを楽しむ。空海の死後も、彼の全てを受け入れるといった巨大な現世肯定の精神は、誰もが出店できるというスタイルに今も脈々と受け継がれており、弘法さんが

続く限り失われまいだろう。東寺に訪れたことがない人は、ぜひ 1 度平安時代の遺構を感じにきて欲しい。できれば 21 日に訪れ、空海が作り出した文化とも言える弘法さんを楽しむことで、彼の精神を受け継いでいって欲しいと願うばかりである。

#### 【参考文献】

『古寺巡礼 京都 東寺』 株式会社淡交社 1976 年

『東寺百合文書を読む よみがえる日本の中世』 株式会社思文閣 1998 年

『新版 古寺巡礼 京都 東寺』 株式会社淡交社 2006 年

『京都・宗祖の旅 空海 [真言宗]』 株式会社淡交社 2014 年